

祖霊は水辺に集う

高知県の盆行事から

Ancestor's Souls Gather Around at Waterside:
A Case of *Bon* Festival in Kochi Prefecture

梅野光興

はじめに

- ①水辺で祭られる祖霊
- ②石塔以前の墓
- ③水神祭祀と祖霊
- ④霊を送る場所
- ⑤葬送習俗の中の「水」

おわりに

【論文要旨】

盆にはあの世から死者が帰って来る。ではどこから？ さまざまな場所が祖霊を迎え、送る場所とされている。その場所を考察することで、日本における霊に対するイメージを知ることができると思われる。民俗伝承の中で圧倒的に多いのは、墓で迎え墓へ送る事例と墓で迎え水辺に送る事例である。墓から迎えながら、水辺に送るのは矛盾である。しかしながら、四国、中国、近畿地方の一部に、仏を川から迎え川へ送るという地域が広がっている。

本稿では、そのうち筆者が実際に調査することができた高知県の事例について紹介する。それによると、水辺で火を焚くことが一般的に見られ、その中に墓に見立てた石を立てたり棚を作って、水を注ぐ所が見られる。立派な墓が別にあるのに、なぜ死者は水辺の「墓」で祭られねばならないのだろうか？

まず、かつては死体を埋葬する墓が、霊の祭場と区別されていたことが考えられる。川辺の「墓」は盆のみに現出する臨時の詣り墓なのである。次に、その場所が水辺であるということから、祖先祭祀と水神儀礼の習合、葬送儀礼のとき霊を川や谷に送る習俗との関係、霊が水を欲するという観念が考えられる。死者が水辺から訪れ、水辺へ帰っていくのは、そのような要素が重なり合い、からみあいながら形成されていったのではないかと考えられる。

キーワード：祖霊，他界観，葬送儀礼，墓，水神